

なお、最初の時期区分のところでは、アブドッラー国王によって斬新な改革が進められ、改革を支えるイスラーム法解釈の時期に入ったともいえるとされるが、サウジアラビアにおけるイスラーム法の適用をめぐる問題についても、もう少し詳しい検討が行われてもよかったように思われる。

(福田 安志 早稲田大学イスラーム地域研究機構上級研究員・教授)

**小松久男『激動の中のイスラーム——中央アジア近現代史』(イスラームを知る 18) 山川出版社
2014年 122頁**

本書はNIHU(人間文化研究機構)プログラム・イスラーム地域研究の成果の一環として発刊されたブックレット「イスラームを知る」シリーズの第18番目のものである。19世紀帝政ロシアの中央アジア征服により、中央アジアの政治的実権は中央アジアの人々自身の手を離れて、ロシアという異教徒の帝国に掌握された。さらに約半世紀を経て、中央アジアはロシア革命の波及によりソヴィエト体制に組み込まれ、無神論イデオロギーを奉ずる社会主義のもとで近代を迎えた。そしてソ連解体と中央アジア諸国の独立という時代を画する近年の出来事により、中央アジアは国際社会に開かれると同時に、内からのイスラーム復興とグローバル・イスラームの双方の波にさらされるようになった。タイトルにある「激動」とは、中央アジアのイスラームに大きな変容をもたらしたこれら一連の体制転換の流れを指している。従って、本書の主たる対象は、ロシア・ソ連による統治、社会主義という歴史的経験をもつ中央アジア地域、現在の国名で言えば、ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン(キルギス)、タジキスタン、トルクメニスタンの領域である。実際の記述はおおむね南部定住民地域を中心に、これらの地域の近現代史をイスラームの観点から概観することが本書の目的である。

冒頭の「激動の幕開け」および「中央アジア史の概観」と題する二つの節を導入として、全体構成としては次に示す章が続く。(章タイトルの後の丸カッコ内に、章の内の小見出しを順に示し、各々をスラッシュで区切っている。)

第1章 ロシア統治下のイスラーム

(ロシアの中のムスリム地域／征服と服従／ロシア統治への不敬の兆候／アンディジャン蜂起／イスラームへのまなざし／殉教者か、愚か者か／ジャディード運動の展開／トルクスタン自治の構想)

第2章 ソ連時代のイスラーム

(ロシア二月革命から自治宣言へ／ソヴィエト政権とイスラーム／イスラームに対する抑圧／大祖国戦争と宗務局／ソ連時代のイスラーム)

第3章 イスラームの覚醒と再生

(革新派の出現／ヒンドゥスターニーの反論／再生するイスラーム／新独立国家のイスラーム)

第4章 イスラームの政治化と過激化

(イスラーム復興党の試み／ウズベキスタンの動向／タジキスタン内戦(1992～97年)／ウズベキスタン・イスラーム運動／グローバル化する運動)

最後に、「ゼンギーアタ廟の風景」と題するエピローグをもって本書は終わる。タシュケント(現在のウズベキスタンの首都)郊外に現存し、今日も参詣者の絶えないこの聖者廟は、本書の記述の中にしばしば登場するのだが、著者は中央アジア近現代史のダイナミズムの中でのイスラームの位置づけを象徴する役割をゼンギーアタ廟に与えているのだろう。

さらに、著者自身の研究テーマに根ざして執筆され、本編の記述とはまた異なった角度から中央アジアのイスラームを照射する3編のコラム、「イブラヒムの中央アジア旅行記」、「ユートピア小説による啓蒙」、「コスタナイの歴史的なモニュメント」も所収されている。

では、章構成に従って、本書の内容を見ていこう。

第1章は、帝政ロシアのイスラーム政策とロシア・ムスリム、とりわけ中央アジア・ムスリムの思想と活動を扱っている。ロシア帝国支配下の中央アジアでは、いわゆる「イスラーム放任政策」(あるいはイスラーム無視政策)が取られたことはすでによく知られているが、ここでは、異教徒支配が中央アジアで受け入れられた要因として、イスラーム法の保持が約束されたことと、そのもとでロシアがもたらしてくれるであろう正義や公正への期待があったこと、ムスリムが異教徒の保護下に入ることがムハンマド由来の故事を引用してイスラーム的文脈で正当化されていたことなどが示されている。一方で、ロシア統治への不信や反発を持つ人々も少なからずおり、ロシア支配は「平安の家(ダール・アル・イスラーム)」なのか「戦争の家(ダール・アル・ハルブ)」なのかをめぐる議論や、中央アジアの伝統的法学派ハナフィー派知識人とスーフィーの間の相互不信が現地ムスリムの間に存在したことなど、近年明らかにされてきた当時の中央アジア・ムスリム社会内部の動態が紹介されている。また、この章では、アンディジャン蜂起(1898年ナクシュバンディー教団の導師がロシアに対するジハードとして弟子たちを率いて起こした蜂起)、ロシア・ムスリムの中から起こった社会改革運動ジャディード運動、多くのジャディードも参画したロシア革命期のトルキスタン自治運動など、著者の長年の研究テーマが、中央アジア現地のものも含めた最新の研究動向をふまえ、整理されている。

第2章は、ソ連という無神論国家におけるイスラームのありようを多角的な視点から扱っている。ロシア革命期の現地ムスリムによる自治運動の終焉、現在の中央アジア諸国の原型を完成させた民族別共和国の設置を経て、ソヴィエト体制のもとで社会主義的近代化が開始された。その初期においてはイスラームは「悪しき伝統」として根絶されるべき対象であり、一連の反イスラーム政策が導入されたが、第二次世界大戦を機に、ソ連内ムスリムの戦争動員を進めるための妥協策として、また対中東外交の重要なカードとして、ソ連においてイスラームに公の位置づけが行われることとなる。この「公のイスラーム」を体現する官庁として設置されたムスリム宗務局が取り上げられ、その役割と仕組み、代表的な宗務局長(ムフティー)の経歴と実績、ソ連の現状にそくして出されたファトワーなどが紹介されている。その一方で、公のイスラームの枠組みからはみ出したところにも実際にはイスラームを保持継承するためのいくつかの抜け道ができ、非合法の宗教教育の拠点が形成された事例などがあげられている。その後再び反イスラーム政策が強まり、著者は、結局のところ、常に「イスラームは政権による容認と排除の間におかれていた」(p.71)と指摘する。

第3章は、中央アジアにおけるイスラーム復興の諸現象をソ連時代末期から現代に至るまで概観している。まず、民族文化の見直しという文脈で宗教復興の諸現象がみられるようになるペレストロイカの時代に先駆けて、中央アジアでは早くも1970年代半ばから、サラフィー主義と軌を一にする革新派(ムジャッディディーヤ)の潮流が現れ、やがてそれは伝統的な信仰を守るハナフィー

派のウラマーらとも、聖者廟参詣などを慣行としてきた住民らとも相容れない存在となったことが紹介されている。「ワッハービー」と呼ばれるようになるこの潮流からは、後のウズベキスタン・イスラーム運動につながるような、いくつもの過激主義組織が出現してくるのである。

ペレストロイカ期になると、ムスリム宗務局の自立志向が芽生えたり、草の根のイスラーム復興の諸現象が顕著となった。スーフィー教団の再生やソ連外から新しいイスラーム思想がもたらされるようになったことにより、イスラーム解釈がいっそう多様化したことが指摘されている。さらに、中央アジア諸国の独立後の状況について、例えばイスラーム教育をあらためて制度化するなど、世俗主義の原則のもとでの新独立国家にふさわしいイスラームのあり方の模索、国家・政治と宗教の関係、信仰に関する人々の意識、他宗教との関係などが取り上げられている。

第4章は、現代の中央アジアにとって深刻な課題でもあるところの、イスラームの政治化と過激化に焦点を当てている。ペレストロイカ期の全ソ連的規模でのイスラーム復興党結成の試みとその挫折、各共和国におけるイスラーム復興党の展開に始まり、後にアフガニスタンでタリバーンの保護を受けて結成された「ウズベキスタン・イスラーム運動」出現の背景と経緯、タジキスタン内戦の経緯と内戦中・内戦後のイスラーム勢力の動向、9.11後の対テロ戦争の中央アジアへの影響などが、資料として確認された当事者たちの言説を交えながら、概観されている。そして、最近年では、イスラーム解放党をはじめとする国際的なイスラーム組織や様々なイスラーム思想潮流の浸透によって、中央アジアのイスラームはますます多様化し、ハナフィー派伝統主義が挑戦を受ける事態となっていることが指摘されている。「イスラームをどこに、どのように位置づけるのか」が「現代の中央アジアが直面している重要な課題の一つ」(pp. 120-121)であることに私も強く同感する。イスラーム観の違いを乗り越えること、あるいは調整することが重要な課題だと言えるだろう。

以上、本書の内容を紹介してきた。ここで、特に言及しておきたいと思うことは、第2章で著者が紹介している、ソ連ムスリムの分類(①確信的な信者、②穏健な信者、③薄弱な信者)(pp. 71-72)の現代的意義である。中央アジアに限らず、旧ソ連圏では③の薄弱な信者(信者の中で最も多いとされる)、あるいはさらに極端な場合には、ソ連の無神論教育によって都市部などではイスラームに限らず宗教全般にアレルギー反応を示すような人々も少なからず存在しているのが現実である。こうした人々が真のムスリムと言えるのかどうかはイスラーム研究の立場からは議論となるところであろう。それでも、こうした分類を念頭に置くことは、旧ソ連圏を対象とする限り、現在も一定程度の有効性を持つのではないだろうか。ソ連時代に民族アイデンティティの中に溶け込ませざるを得なかったムスリムとしてのアイデンティティのありようや変化、その宗教実践との関係といった観点からの実態分析と事例の積み上げが今日の旧ソ連圏のイスラームを見る際には必要だと思われる。その点では、ソ連解体以降可能になった文化人類学的なフィールドワークの成果にも大いに期待したいところである。

全体として、本書には中央アジア史研究の日本内外の最新の研究成果やフィールドワークによる知見が、さまざまなエピソードや言説を交えて、わかりやすくコンパクトに盛り込まれており、一般向けの読み物として面白いだけでなく、中央アジア近現代史研究、あるいは中央アジアに限らず旧ソ連圏のイスラーム研究を志すにあたって必読の入門書のひとつだともいえるだろう。さらに、中央アジアというと、まさにそこがかつてロシア=ソ連世界の一部に組み入れられ、社会主義のもとで徹底した世俗化政策を経験してきたがゆえに、日常的な信仰実践をかなりの程度失っており、ともすればイスラーム地域としては特殊だと考えられがちであるかもしれない。しかし、本書でも

指摘されているように、グローバル化が進み、中央アジアが旧ソ連外のイスラーム地域と直接間接につながっていく現状を念頭に置くなら、今後はイスラーム研究や中東研究などとのより積極的な議論の接合が求められてくるだろう。ソ連解体後の中央アジア研究の深化によって、中央アジアのイスラームの動態は、近年飛躍的に掘り下げられてきている。そうした観点から見れば、本書は、中央アジア研究とイスラーム研究・中東研究をつなぐ視点・論点の発見のための入門編としても好適の書だといえるだろう。

(帯谷 知可 京都大学地域研究統合情報センター准教授)

ティモシー・ミッチェル (著) / 大塚和夫・赤堀雅幸 (訳) 『エジプトを植民地化する——博覧会世界と規律訓練的権力』 法政大学出版局 2014年 328頁

本書は、Timothy Mitchell, *Colonizing Egypt* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988) の邦訳である。本書の訳者あとがきにあるように、本書全体の解説が述べられている序文を所収するペーパーバック版 (1991年) が底本として採用されている。

著者のティモシー・ミッチェルは、歴史学・政治学を専門とする著名な中東研究者である。ミッチェルの勤務するコロンビア大学のウェブサイトから、彼の経歴を簡単に紹介したい。英国生まれの彼は、ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジにおいて、歴史学の学士号を取得した。その後、米国プリンストン大学大学院に学び、1984年に政治学および近東研究の博士号を取得した。同年、ニューヨーク大学に赴任し、政治学の教員としてその後25年間教鞭をとった。同学では、近東研究センターの所長も務めた。2008年にコロンビア大学へ異動し、現在に至るまで中東・南アジア・アフリカ研究科で教鞭をとっている。また、アカデミックな活動のみならず、パレスチナ問題など中東地域の政治問題に関しても積極的な発言をしている。本書以外の彼の主要な著作としては、Timothy Mitchell, *Rule of Experts: Egypt, Techno-Politics, Modernity* (Berkeley: University of California Press, 2002), Timothy Mitchell, *Carbon Democracy: Political Power in the Age of Oil* (London: Verso, 2011) などがある。

Colonizing Egypt は1988年の刊行以降、エジプト研究者のみならず、近代以降の中東を学ぶ者にとって、必読の書とされてきた。エジプト政治を専門とする評者も、研究を始めて間もない頃、本書を手にとった。その時の感想は、「難しすぎて歯が立たない」であった。とはいえ、必読の書を読まないわけにはいかず、何度も挫折しつつ何とか読了した。その際に幾度となく思ったのは、邦訳があればよいのということであった。このような思いをした評者にとって、本書の刊行は個人的にも非常に嬉しいことである。

本書の訳者は、大塚和夫氏と赤堀雅幸氏である。大塚氏は、2009年に亡くなるまで日本における中東研究と人類学を牽引してきた研究者である。また、赤堀氏も同じ研究領域において日本を代表する研究者である。1990年代前半から大塚氏と赤堀氏による訳出作業が続けられ、ついにこの度の刊行へと至った。この両名ほど本書の訳者としてふさわしい研究者はいないと評者は考えており、我々が両名の訳による本書を手に行うことは僥倖である。

本書の主題は、「英国によるエジプト植民地化の歴史の研究ではなく、植民地化する権力の研究」であり、「植民地化の事業が日ごとに進められていくその詳細に目を向け、そうした権力の形而上